



Title	対話・実践・第二言語リテラシー : 日本語学習者のストーリーテリング活動の様相
Author(s)	嶋津, 百代
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49477
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【6】	
氏 名	嶋 津 百 代
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 2 2 3 9 3 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 20 年 6 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	対話・実践・第二言語リテラシー—日本語学習者のストーリーテリング活動の様相—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 西口 光一 (副査) 教 授 沖田 知子 准教授 大谷 晋也

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、教室活動として行われたストーリーテリング活動における日本語学習者間の対話を分析し、学習者の様々な言語行為が観察される現象から、日本語学習者の第二言語リテラシーについて考察したものである。従来の第二言語教育が採用してきた、第二言語話者の言語能力や言語活動を捉える枠組み転換の必要性を指摘し、対象言語の母語話者の言語規範に基づく言語能力を理想とするのではなく、第二言語話者の視点に立った第二言語能力の考察を試みた。

序論では、本論文の執筆に至った問題意識に関連する先行研究を紹介し、従来の第二言語学習者の能力観を検討した上で、本研究における第二言語リテラシーを定義した。本研究では、学習者の第二言語リテラシ

一は、他の学習者との対話を通して具現化されていき、第二言語のことばを媒介にして修正され更新されていくと考えた。また、第二言語リテラシーは、学習者の第一言語と第二言語に関する知識や、両言語による言語体験が学習者の思考において共存した状態にあるとした。そして、第二言語リテラシーの具現化とは、第二言語学習者が第一言語あるいは第二言語を媒介とした経験からすでに獲得していて、様々な状況において振舞う指針となるある種の行為体系や言語機構を基に、他の学習者と協働して創造していく第二言語で示される現実の様態であると捉えた。このような第二言語リテラシーの定義を念頭に、本研究では、第二言語を用いて行動し表現する第二言語話者としての様々な行為が要求されるストーリーテリング活動を分析の対象として、日本語学習者の言語行為を観察し、学習者自身が具現化していく第二言語能力を考察していくこと、また、そうした第二言語能力を考察することで、今後の日本語教育の方向性も合わせて検討することを研究目的として挙げた。

続く第2章と第3章では、先行研究の概観を中心に、言語活動全般に関する理論的な考察を通して、本研究における第二言語学習者の言語活動の捉え方を説明し、また、ストーリーテリングに関する先行研究の知見を参考に、第二言語習得や日本語教育の分野における本研究の位置づけを明確にした。本研究では、学習者の言語活動を捉える枠組みとして、話し手の発話の提示、それに対する聞き手の理解と応答という言語的交差に基づくダイアロジズムの観点(Bakhtin, 1981)を採用した。第2章と第3章の先行研究の概観を通して、本研究で取り上げるストーリーテリング活動と、学習者の言語活動を支える対話と実践、そして、学習者の第二言語リテラシーとの関連を包括して論じることができたであろう。

第4章では、大学の外国人留学生対象の日本語会話クラスにおいて、本研究のために行ったストーリーテリング活動や日本語学習者とのインタビューの収録などの具体的なデータ収集の方法を説明した。ダイアロジズムの観点から学習者の言語活動を捉える本研究が、ストーリーテリング活動における学習者の対話の分析の枠組みとして採用した、Markova (1990) の対話の分析単位を概説した。段階を経て構成されていく学習者間のターンの移行を、学習者双方が互いのパースペクティブを取り込みながら、各々のパースペクティブを協働的に発展させていく過程と捉えた。

第5章と第6章は、そのような対話の分析の観点に基づいて、学習者のストーリーテリング活動を録音・録画したデータの分析を行い、ストーリーテリング活動において学習者の様々な行為が観察される現象を取り上げ、日本語学習者の第二言語リテラシーの具現化や実践を考察した。

第5章では、まず、学習者間でストーリーが協働的に形成されていく過程や、ストーリーの内容やポイントの理解を巡る学習者間の交渉の過程に、ストーリーテリング活動において学習者間で協働的に経験と知識が共有され(再)構築されていく様態を観察し、学習者の第二言語リテラシーの具現化を見た。ストーリーテリングの先行研究で明らかにされている現象同様、本研究のストーリーテリング活動においても、学習者はストーリーに対するスタンスを呈示しながらストーリーを協働的に形成し、語り手の経験を再構築していくのが観察された。一方、従来の第二言語習得研究が前提としてきた、第二言語能力の不完全さから生じる学習者の言語調整行動、すなわちストラテジーとしてのリソースの使用や修正は、ストーリーテリングを達成するという活動の目的から見ると、ストーリーの内容やポイントの理解に必要とされる知識を学習者間で共有するために起こっていることが分かった。

次に、聞き手としての学習者の行為に焦点を定め、Clark & Schaefer (1989) の「聞き手の理解の証拠」を

援用し、聞き手が語り手のストーリー内容やポイントを理解した証拠となる行為や、それに続く応答のためのリソース使用などが観察できる具体的な現象を挙げた。語り手のストーリー展開の様相は、ストーリーテリングに積極的に関与し貢献していく聞き手の能動的な行為によって異なってくることが明らかになった。また、こうした聞き手による応答のためのリソース使用が観察されるストーリーテリングを分析する際、語り手と聞き手がストーリー理解のためのパースペクティブを共有し、それを呈示していくといったダイアロジズムに基づく観点を導入したことによって、聞き手としての学習者の能動的な行為がより深く理解できたとと言える。そして、このような聞き手の行為に注目した分析によって、第5章では、本研究のストーリーテリング活動が、聞き手に対しても能動的な参加の機会を与え、学習者に第二言語リテラシーの実践の場を与えていることも明らかになった。

第6章では、本研究のために行われたストーリーテリング活動を教室活動として見た場合に観察される現象を提示し、学習者がストーリーテリング活動を達成していく過程に具現化される第二言語リテラシーを考察した。まず、学習者によるストーリーテリングの開始と完了の決定や、ストーリーのトピックの維持に、教室活動に関する学習者の認識が立ち現れる様相を観察し、そうした学習者の認識に、日常会話で生じるストーリーテリングとは異なる教室活動としてのストーリーテリング活動の制度的な側面を見た。次に、ストーリーのトピックやストーリーの展開の仕方を巡って起こった学習者間の交渉の過程に、ストーリーテリングという活動についての学習者の知識が呈示され、問題を解決しストーリーテリング活動を達成していくためのリソースとして、他の学習者と共有されていく現象を観察した。そして、その過程で、学習者が活動で与えられた役割を支援しながら、ストーリー展開のためにリテラシーを調整していく様相を考察した。こうした教室活動やストーリーテリングに関する学習者の認識や知識の呈示、学習者のストーリーテリング活動への参加の様相や問題解決のための交渉の過程、活動で与えられた役割を担う学習者の行為を探ることで、第6章では、教室活動としてのストーリーテリング活動の多面的な性質を明らかにし、教室活動の実践過程における第二言語リテラシーの具現化の一つの様態を提示することができたであろう。

こうして第5章と第6章において行ったデータ分析で明らかになった事柄との関連にも触れつつ、第7章では、学習者とのインタビュー・データから、ストーリーテリング活動や教室外での第二言語環境における学習者の様々な意識や気づきを取り上げた。そうした学習者の意識や気づきと第二言語リテラシーとの関連を考察したことで、ストーリーテリング活動に観察される学習者の参加の構造がより包括的に理解でき、活動で実現された第二言語話者としての行為の特質も検討することができたとと言える。

第7章では、まず、ストーリーテリング活動における学習者の意識や気づきから、教室活動の実践に根ざした学習者の意識が、学習者間で衝突することで新たな気づきが生じること、また、第一言語のことばと第二言語のことばの相違についての気づきから、学習者は第二言語リテラシーに基づく視点を明確にすることが明らかになった。さらに、ストーリーテリング活動における他の学習者との対話を通して、互いの第二言語能力を図りながら、自己呈示のためのリソースを選択したり、リソースとして用いる自身のリテラシーを決定したり調整したりする学習者の行為も明らかになり、イデオロギー的形成(Bakhtin, 1986)の過程における第二言語話者としての振舞いの一例を見た。また、学習者は、教室外の第二言語環境で、日本語母語話者あるいは第二言語話者との対話を繰り返し経験することによって、そうした環境も学習者にとってイデオロギー的形成の場となっていることが窺えた。このように、第7章では、インタビューで語られた学習

者の意識や気づきを取り上げ考察することによって、ストーリーテリング活動で第二言語リテラシーを実践していくことが、第二言語話者としての学習者の潜在的な可能性を引き出すと同時に、第二言語話者としてのイデオロギ的の形成の可能性を学習者に与えることを示唆できたであろう。

本論文の最終章である第8章では、以上で述べた本研究のデータ分析で考察してきた第二言語話者の視点に立った第二言語能力に改めて検討を加えた。第5章から第7章にかけて観察してきた日本語学習者の行為に具現化される第二言語能力は、対象言語の母語話者の言語能力を比較対象にして判断されうものではない。それは、常に第二言語話者間の対話において考察される必要があり、そのことが第二言語話者間で理解され共有されてこそ、その能力が能力として具象化されていく。そのため、第二言語話者がこれまでの経験を基に獲得している認識や知識をどのように扱うか、そうした認識や知識を、他者との対話においてどのように呈示させていくかが、第二言語話者自身の視点で決定されていかなければならないことを指摘し、第二言語習得研究や日本語教育への本研究の示唆とした。

論文審査の結果の要旨

現在、世界各国で社会の多言語・多文化化が急速に進んでおり、日本もその例外ではない。このような時代にあつて、第二言語教育においても、母語話者の言語能力を規範とする従来の第二言語教育あるいは第二言語習得研究のあり方が見直されつつある。本論文は、そうした問題意識の下に、第二言語話者の視点に立った発達しつつある第二言語能力の捉え方及び第二言語話者による具体的な活動でのそうした能力の顕現の様態を理論的及び実証的に考究しようとするものである。

まず、理論的考究においては、これまでの代表的な研究を概観し批判的に検討した上で、第二言語リテラシーという視点を提示している。そして、同視点の根拠として、パフチンのダイアロジズム（対話原理）を基盤として「対話における協働理論」や「3段階コミュニケーションモデル」などを相互に関連づけながら理論的な議論を堅固に構築している。また、本研究で扱われるストーリーテリング活動についても、ストーリーの協働構築に関連する研究等を概観し検討した上で、アセスメントや聞き手の理解の証拠など本研究のテーマにふさわしい実証研究のための方法を提示している。

そして、実証的研究の部分では、独特の4人一組の形でストーリーテリングの状況を設定して計43話のデータ（540分）を収集し、話し手の役割において、聞き手の役割において、また教室という制度的な状況においてなど、さまざまな形で顕現される第二言語リテラシーの様態を多面的に記述している。さらにストーリーテリング後にインタビューを行って言語活動中の学習者の意識や気づきにも焦点を当てている。

このように本論文は、綿密な理論的考究と堅実な実証的研究の下に第二言語話者の言語活動や言語能力を見る新たな視点を説得力のある形で示したものであり、同分野での重要な研究成

果となりうるものである。多方面の研究に言及しているために用語が十分明瞭に説明しきれていない箇所や第二言語話者独自の特質が必ずしも十分に浮き彫りにされていない部分などもあるが本論文の価値を損なうものではない。このように本論文は発展中の当該分野の研究に重要な寄与をなしうる優れた研究であると考えられ、審査委員会は、本論文を博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値あるものと判定した。